

それだけではない。百貨店の三越に関する資料を探して、書架に辿りつき『三越85年の記録』を取り出して戻ろうとすると、ふと『株式会社丸井今井創業百二十年史』が目にとまり、関係はないけれどつい中身を確認してみたくなるといったことが起こる。文学者の個人全集などを取める書棚を歩いていると、作家の初版本（ほるぶ出版が作った復刻版だが）が気になる。芥川龍之介の『支那遊記』の初版（大正14年）はカラフルな箱入り、それに比べて石川啄木の初詩集『あこがれ』（明治38年）のなんと地味な並製本よ。人によって、時によって書棚から呼びかけられる本は異なり、図書館はまるで違った表情を見せてくれるだろう。

1階書庫へ

2階の奥まったところにあるエレベータで1階へ。扉が開くと正面に「文化学部図書」と書かれた書棚が眼に入る。なんだか古本屋に来たようなにおいがする。ここには窓がなく、びっしりと本が詰まっている。移動書架の側面に回ってボタンを押して棚を動かしてみよう。外国語文献の量に圧倒されるかもしれない。洋書だけではない。奥に向かう左手には『四庫全書』1800巻が天井まで並んでいる。これは明の時代に皇帝が中国全土から集めさせた書物の全集だ。『四庫全書』の手前にはガラスに囲まれた、貴重書コーナーがあり、18・19世紀の社会科学系の古書や「ゲーテンベルグ42行聖書」のファクシミリ版などがある。

その先には「立ち入り禁止」の看板が立っている。どうしてもこの奥を覗いてみたければカウンターに相談してみよう。あるいはゼミの先生に頼んでいっしょに行ってみる。ここには「郡司文庫」や「川島文庫」がある。前者は札幌市出身で早稲田大学演劇博物館館長などを勤めた郡司正勝先生の歌舞伎・演劇関連書を中心とする個人蔵書。後者は法社会学者で、『日本人の法意識』（岩波新書）というすぐれた本を著した、川島武宜（たけよし）東大名誉教授の個人蔵書だ。川島武宜は、政治学の丸山真男、経済史の大塚久雄と並び、戦後日本の社会科学を方向づけた三人の一人といわれる。さらに松田道雄のロシア語文献も含め、あまり知られていないが、とてもユニークな個人文庫が札大図書館にはあるのだ。

山口文庫について

1階の奥までやってくるのはかなりの本好きといえる。さて、3階に行っていると紙数が尽きそうなので、この度私たちの図書館に新たに加わることになった山口文庫についてちょっと紹介しよう。

6号館の地下室に秘密基地のような本の宝庫がある。山口文庫の公開についての詳しい案内は後日にゆずるが、ここは札幌大学の元学長、世界的な文化人類学者である山口昌男先生が学生時代から集めた個人蔵書だ。その規模はなんと4万冊。民俗品コレクションも含まれている。アフリカや南米、世界各地で買い求めた本には、その土地の色彩と香りがある。1997年に文化学部が創設された際に初代学部長だった山口先生が、新しい学部で学ぶ学生のために寄贈したものだ。だから今まで「文化学部の山口文庫」とされており、一昨年来閉室状態だった。この度札大図書館が管理運営することになり、まもなく全学に開かれる予定だ。

山口文庫の魅力は、何といっても卓越した個性によって蒐められた書物の群れが響き合うにぎやかで少し猥雑で、自由な空気といえるだろう。『本の神話学』『道化の民俗学』『人類学的思考』『文化の詩学』『敗者の精神史』などの著作で多くの読者を魅了してきた山口昌男という「知の巨人」の頭脳を探訪することができる。個人文庫のもつさまざまな魅力については、これからもコメントしていきたい。

さあ扉を開けて本の宇宙へと足を踏み入れよう。未来の探究者が発見するだろうテーマがたくさん詰まった空間へ。図書館をさまよい歩こう。



山口文庫